

E—17) 増殖性筋膜炎の一例

松岡健太郎¹⁾, 坂田 晃子¹⁾, 大喜多 肇^{1), 2)}, 中川 温子¹⁾

症例は9か月，男児，生来健康．左膝関節裏側の直径2センチ大の硬い腫瘤に気がつき来院．表面平滑，弾性硬，皮膚との癒着はなく筋膜と固着していた．家族歴，検査成績に特記すべきことはない．画像検索にて転移を示唆する所見はなかった．2 cm 大の腫瘤が切除された．断面にて7 mm 大の充実性腫瘍がみられた．

脂肪組織によって囲まれ，周囲との境界が比較的明瞭な充実性病変が認められた（図1）．病変部には好塩基性の細胞質と核小体の目立つ大型類円形核と豊かな細胞質を有する類円形～紡錘形細胞が密に増殖する部分と浮腫状の間質を背景とする細胞密度の低い部が認められた．多数の核分裂像が見られ，好中球の浸潤を伴っていた（図2）．腫瘍の辺縁では筋膜と考えられる結合織を巻き込む像がみられた．大型細胞の増生が主たる病変で，鑑別診断として増殖性筋膜炎などの線維芽細胞性増殖病変，横紋筋肉腫，悪性線維性組織球腫，類上皮肉腫さらにはALCLなどを考慮した．免疫組織学的には上記の大型細胞はVimentin 陽性，HHF35, cytokeratin AE1/AE3 が一部陽性で，SMA, Desmin, Myogenin, BAF47, S-100, EMA, CD30, ALK などは陰性であった．以上の免疫組織学的所見および筋膜を一部で巻き込んでいることから，増殖性筋膜炎と診断した．

増殖性筋膜炎は40歳以上の成人の前腕や大腿の皮下脂肪組織ないし浅在筋膜に好発し，2～3週間の経過で急速に発育する腫瘤を形成する．結節性筋膜炎類似の線維芽細胞および筋線維芽細胞の増殖がみられるとともに，神経節細胞類似巨細胞（Ganglion-like cell）が出現することが特徴である．性差はない．小児にはまれであり，組織学的には成人に発症するものと基本的には同様の組織



図1 脂肪組織によって囲まれ，周囲との境界は比較的明瞭である．（HE 染色）

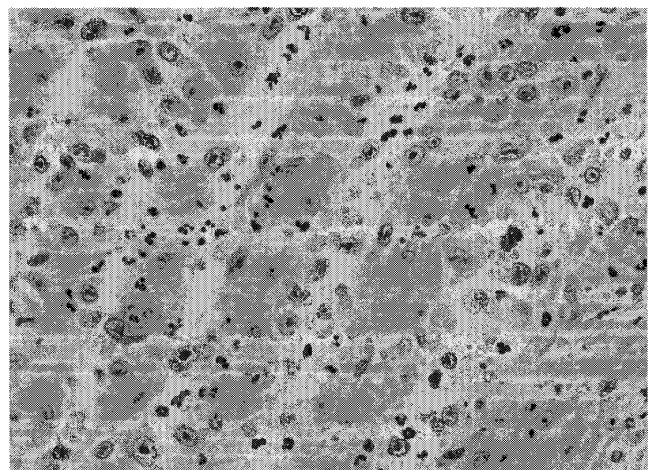


図2 核小体の目立つ大型核と好塩基性の豊かな細胞質を有する細胞の増殖よりなる．核分裂像が散見され，好中球浸潤を伴っている．（HE 染色）

像を呈するが，成人発症例と比較して小児では境界明瞭で，分葉状を呈し，より細胞成分が多く，膠原線維が乏しいとされる．急性炎症性細胞浸潤を伴うことがあり，微小な壊死が見られることがある．予後は良好であり，増殖性筋膜炎／筋炎を悪性腫瘍と誤診して過剰な治療を行わないことが肝要である．

1) 国立成育医療センター病理診断科

2) 同研究所発生・分化研究部